

私小説☆スタンダード・バイ・ミー

この四篇は、二十年前に当時のSNSに投稿した文章をまとめたものである。自分自身の他愛もない酒席の話から、妹の離婚話や友人の死の問題なども題材にしていて、私小説と呼ぶには少々恥ずかしい思いである。

しかし、利害関係の無い方には只の「遠い世界の物語」でしかないので、箸休め程度に読み飛ばして頂いて一向に構わない。

因みにタイトルは、執筆当時に好きだった映画の題名を宛てている。

1. 聖なる酔っ払いの伝説

CASE. 1

つい先日、何の気無しにテレビを付けたら、懐かしい映画が放映されていて、そのテーマ曲が妙に耳に残った。

Berlinの「Take My Breath Away」。二十年以上も前の曲を久し振りに聞きながら、少し思い出に耽った。

それは、私が未だ東京に住み始めたばかりの頃、当時勤めていた職場で飲み会があつて、十人ほどで居酒屋に行つた時のこと。

その日は、私より三年年長の先輩が幹事で、事前に席順まで決めてくれていた。実は、私は事前に彼にお願いして、同期の女の子の隣に座れるように頼んでおいたのだ。

彼女と私は掃除用品のデリバリーダン担当で、廻る地域も同じだったので、その日の仕事が早く終わると、会社に戻る前に、何人かで喫茶店に行つて良く話していた。ただ、私と彼女が一人で話すということは余りなく、だから、今日こそはチャンスだと思っていた。

乾杯の余韻がまだ残る中、さっそく私は彼女に話しかける。

「ぼくらさ、あんまり、ちゃんと喋つてないよね。」

「うん、仕事の時つて、忙しいもんね。」

こんな、他愛も無い会話だが、なぜかすごく嬉しい。

気がつくと、私と彼女は、他の同僚達から少し離れた場所で話していた。先輩が気を使って皆を離れた場所に移してくれていたのだ。彼に目を向けると、半笑いで「うまくやれよ」という目配せをしたので、私は「申し訳ない」という目を彼に帰した。

次第に話は盛り上がり、今日はこれから、どこかで映画でもみようか、という所まで踏み込んで聞いてみた。以外に返事はOK。社長の締め挨拶をうわの空で聞きながら、どんな映画をみようかなんて想像を巡らす。

駅前の三角ビルを横目に、私と彼女はレンタルショッピングへ。店内、新作のコーナーでトム・クルーズ主演の『トップガン』を見つけ、「これ見たかったんだよな。」と言うと、彼女はちょっと眉をひそめながら「別に何でも良いけど…。」と答えた。

あまり女の子向けの映画じゃないことは、後で気が付いた。デートのセオリーもわきまえられない可哀そうな男は、好きな映画を観られることに、ただただ興奮していた。

先輩の家は、そのレンタルショッピングから数分の場所にあった。彼は私のために、その日、部屋の鍵を預けてくれていたのだ。こんな最高のシチュエーションは、二度とないかも知れない。というか事実、以降一度と無かつた。

真新しいその部屋は、掃除も行き届いていた。私たちは、途中のコンビニで買った酒とおつまみを開け、ビデオのスイッチを入れた…。

気がつくと、私はベッドで寝ていた。窓からは暖かい朝の光が降り注いでいる。

自分のしてしまった事に気づくまで、二分位の頭の整理が必要だった。

…しまった…、寝てしまった。

後悔は先に立たない、常にほろ苦い思い出とともに、私の顔を紅潮させる…。

言うまでもなく、Berlinの「Take My Breath Away」は映画「トップガン」のテーマ曲だ。

CASE. 2

「あっ、この靴。また、小出がきてるぞ。」

「あいつ、酔っぱらうと性格変わるんだよな。」

ある夜の弟との会話。夕方、学校から戻ると、妹の担任である小出先生が、われわれの父親を訪ねて来ていた。

小学校の家庭訪問で始めて家に来たのが半年前で、そのとき親父と意気投合したらしく、それ以来仕事以外でも度々来るようになっていた。

彼には、ある癖があつた。普段は温和なのだが、酒が入ると何とも凶暴に変貌するのだ。私たち兄弟は、酔つた彼がたまらなく怖かつた。

この前は、寝ている私を、むりやりベッドから引きずり下ろし、その前の週に視力検査で、視力の下がった私の左目の視力を上げるとか言って、強引に右手の親指で、瞼を押さえつけた。

その力と言つたら、半端無くて、私は飛び上がって悲鳴をあげた。

毎回そんな調子だから、今日は何をされるのかと思うと、とても怖くなり、私は、家には入らずに、弟と一緒に近くの公園に向かつた。

星空を眺めながら、いろいろと思いを巡らしてみる。当時の自分には知るすべもない、「お酒」によって、人間がこんなにも変わってしまうことが、私には信じられなかつたから、きっとその「お酒」には毒でも入つてゐるんだと、素朴に思つていた。

毒といえば、私が上京して、初めて新宿の歌舞伎町に映画を観に来た時、周りの友達から「歌舞伎町は怖い街」と吹き込まれて、道行く人が全員麻薬中毒者だと信じてビクビクしていたことを思い出す。

ともあれ、その夜は、かなり遅くなつて家に戻つた。幸いにも小出先生は上機嫌で帰宅した後、心配した両親がわれわれを出迎えてくれた。

正直に家に帰らなかつた訳を話すと、翌日以来、小出先生は来なくなつた。きっと母親が小出先生に話してくれたのだと思う。

蛇足ながら、後に、ジャッキーチェンのいわゆる初期三部作、「蛇拳」「醉拳」「笑拳」を観て、彼のファンになるも、「醉拳」だけは好きになれなかつたのは、いわずもがな小出先生の影響である。

CASE. 3

♪小原庄助さん、なんで身上つぶした?

朝寝朝酒朝湯が大好きで、それで身上つぶした、

あ～もつともだあ、もつともだあ♪

父親が酔うとよく歌つていた唄である。「身上」の意味がわからなくて、本人に聞いてみても、「そういう唄だから」と返つてくるばかり、父親もよくわかっていないかったみたいだ。

そんな親父は、私にとって、とても畏怖すべき存在であった。寡黙で、めったな事で笑わない人。しかし、か

つて、木材の切り出し・運搬を行っていた、その二の腕は、まさに筋肉の塊で、私もいつかはあになりたいと、密かに憧れていた。

私たち子供が生まれ、父親も、生活の安定のために会社勤めをするようになつた。当時勤めていたバス会社では、路線バスの運転の他にも慣れない事務仕事を宛がわれ、休みの日など、四苦八苦しながら仕事をしている姿を、何度か見かけたことがある。

そんなある日、私が高校から戻ると、何やら慌ただしい気配が…。向いのお菓子やのおばちゃんがやけに神妙な顔でやってきて、「お父ちゃん、大丈夫かね」なんて聞いてくる。こつちは、何が何だかわからないから、「おとうちゃん、どうしちゃったのかな」と逆に質問してみると、どうも昼すぎに救急車が来て運ばれていったそうである。

母親には病院から連絡が入って、彼女は職場から、そのまま病院へ向かった。家に取り残されたのは私一人。それから、連絡が来るまでの時間は、実に心細かつた。

居間の机の上には、散らばった書類が無造作に束ねられ、座布団がありえない方向に向いている。きっと親父は、突然の痛みに襲われ、机の周りをのたうち回ったのだろうか、なんて想像を巡らすと、夕暮れの刹那感とも相まって、なんとも切ない気持ちになる。

病院から連絡が入り、親父の病名を聞く。「くもまくかしゅつけつ」脳の病氣だ。

それから、半日にもわたる手術で、なんとか一命はとりとめたが、障害は残った。

そういえば、何年か前の健康診断で、医者からお酒を控えるように言われたとかで、母親と口喧嘩していたことがあった。本人は、飲みたいのに、飲めないストレスから母親に不満をぶつけていたのだった。

その後は、適度な飲酒は許されたものの、親父の血圧は依然高く、薬の常用を義務付けられていた。

なぜ、そんなにしてまでお酒を飲みたいと思うのだろう。

「自業自得だよ」、シニカルな母は、とても冷たく言い放つ。

でも、私の頭の中で、真っ赤な顔をした父は、相変わらず陽気に歌っている。

♪小原庄助さん、なんで身上つぶした?

朝寝朝酒朝湯が大好きで、それで身上つぶした、

あ～もつともだあ、もつともだあ♪

2. 彼女について私が知っている一、三の事柄

CASE. 1

彼女は、最近食欲旺盛だ。一緒に食事に行つても、財布の残高が気になつてソワソワしてしまうほど。その所為か、半年も見ないうちに身長は百五十センチを超えて、学年で一番高いそうだ。きっと、そう遠くない未来、私は彼女に見下されるだろう。

彼女は脅威の遺伝子を受け継ぐ、恐るべき小学生だ。

そんな彼女は、小学校の四年生にもなるのに、けつこう泣き虫で、母親に怒られるたびに瞼を腫らして泣いている。妹を目の前にしてもお構いなしだ。

以前、こんなことがあった。私と彼女の母親（私の妹）が所用で実家に帰省することになり、彼女らが寝静まつたころに出発しようと打ち合わせていた。

普段通りの食事をし、いつも見ているテレビを見て、「そろそろ寝ようか」と母親に誘われて寝室へ。しかし、彼女は、さり気ない母親の仕草にも、いつもと違う様子を感じ取っていた。

私と妹が、物音を立てないように出発の準備をしていると、毛虫のように瞼を腫らした彼女が、「どっかに行っちゃうの？」と大声で寝室から出てきた。

すると、妹までもが、その声に共振して、大合唱が始まった。私はいたたまれなくて、外の駐車場に出た。それから、結局一時間ほど、彼女らを寝かしつけるまで、私は、冬の寒空の下、アイドリングもしないで、

車中にて妹を待つ他無かつた。

しかし、たった一日、二日の別れが、今生の別れのように感じてしまう感性。ただの甘えん坊だと毒づく妹を尻目に、私はある情景を思い出していた。

それは、彼女が生まれて二年後、本人にすれば弟の誕生を目前に控えたある日、両親が居ない部屋で私と二人きりになった時に、ふと見せた悲しげで、物憂げな眼差しであった。

考えてみれば、それからしばらくして生まれた弟は、未熟児で、生後半年も経たないうちに亡くなってしまった。

それを予見していたのかは定かではないが、彼女の泣き顔の底には、とても深い悲しみが満ちているような気がして、仕方がない。

それは、彼女の母親、そしてまたその母親の眼差しへと連鎖していく。

CASE. 2

「お兄さん、彼女が行方不明なんです。」

朝早い電話で起こされた私は、眠い目をこすりながら、「いつからなの」と聞き返した。

慌てて電話を掛けてきたのは、妹の夫だ。何でも、普段どおりの食事をして、いつもの時間に就寝し、次の朝、目覚めた時には、荷物も何もかもが無くなっていたのだそうだ。全く彼女らしいやり方だ。

彼女は、気性の激しい私の妹。

思えばその一ヶ月前、彼女夫婦の家に呼ばれ、近くの飲み屋に三人で行った際、夫が席を外したその僅かな

間に、妹が漏らした一言が気になっていた。

「子供が生みたい…。」

同郷同士の二人が結婚して二年、周りから子供を急かされる環境に嫌気を感じているのかと思つていたのだが、彼女の本心は違つていたらしい。

何らかの理由で子供ができない境遇であったということである。それがどちらの所為なのかは直接聞くこともできなかつた。

狼狽した夫は、失踪した妻の行方を探るべく、私に本人から連絡が無かつたかをしつこく聞き、「一緒に、彼女が行きそうな場所に行きましょう。」と、私を終日、車で連れまわした。

失礼な言い方かも知れないが、彼が必死になればなるほど、私は醒めていった。

彼女がよく行つていたといわれるレストランや喫茶店にいつても、これといった手掛りは無く、くだらない思い出話を聞くことからくる、ストレスだけが蓄積していった。

「彼女から電話があつたら、すぐに電話して下さいね。」と彼は名刺を置き、去つていった。大手ゼネコン企業の肩書きが、何故か空しいものに感じられた。

それから一週間ほどして、妹から連絡が入つた。バイト先で知り合つた男と、川崎に駆け落ちしたのだと言う。おまけに彼女にとつては待望の子供を宿して。

前途有望なゼネコン夫と、草野球好きなガテン系彼氏を天秤にかけるほど、彼女の価値観は歪んでいなかつたと、私は信じる。ゆえに、子供を授かりたいという、彼女の純粋な欲求を、私は支持する以外にない。

その後生まれた娘もいつか大人になり、自分がこのような状況を経て生まれたことを知る日がくるだろう。そのときには、精一杯幸せの意味を感じ取つて欲しいと思う。

CASE. 3

五年ぶりの「家族団らん」は、沈黙が支配しているかのような雰囲気だった。

張り詰めた空氣を破つて、おもむろに弟が「お袋がやるつて言うんだつたら、全面的にバツクアップするよ。」と口を開いた。眉間に皺を寄せ、考え込んでいた彼女は、その言葉に安心したのか、「うん、わかつた。頑張つてみる」と笑顔を見せた。

昔から喋らせたら彼女の右に出るものはない…と、ひそかに私は確信している。

そんな彼女ではあるが、まさか市会議員に立候補するとは、家族中の誰もが予想もしていなかつた。選挙運動は未経験者の私たち家族に、果たして選挙運動など務まるのだろうか、そう思うと、暗い気持ちになつた。

私にしても、この歳になって、かつてのクラスメイトたちに頭を下げて、「うちの親を宣しくお願ひします。」などというのは、とても恥ずかしくて、彼らの嘲笑サラウンドに晒される夢を見ながら、ひとり赤面していたのである。

そんな中で、弟の英断は、家族の絆を再確認させるものとなつた。十年前に父親が脳出血で倒れて以降、家計を支え、苦労をかけ続けている母親に、少しでも報いることができればという、私たち子供の恩返しとして、それは意味を持つものであった。

二週間の選挙期間中は、会社に有給を取つて、週に三回、東京と長野の実家を往復した。朝は六時から、街頭に立ち、行きかう車を見送つた。それからは分割みのスケジュールで、宣伝カーに乗り込み、町中をグルグルと廻つていると、あつという間に日が暮れて、車から降りた途端、それまでの疲れが込み上げてくる。倒れこむ

ようく眠ると、もう次の日の朝という具合で、今から考えると、本当に辛かった。

投票日には、介護の仕事をしている母親の患者を迎えて行き（候補者が送迎すると選挙違反になるという理由で）、介添えしながら投票所に送つていった。

車の中で「あんなに一生懸命支えてくれる人が当選してくれると、私も嬉しい」という、そのお婆ちゃんの言葉に、一人感動したりしていた。

そして、開票。

女性候補には逆風の、保守的な地域ではありながら、十四人の候補者中七位の投票数でみごと当選を果たした。選挙事務所になっていた私の実家は、驚天動地の大賑わいであった。

彼女は、関係者に囲まれた祝勝会で、一瞬だけ涙を見せた。それは、私たち子供の前では決して見せなかつた涙だった。

3. 大人は判ってくれない

CASE. 1

私は幼少より無口だったので、よく親からは「何を考えているのか判らない子」と言われた。小学校の二年

の時に、近所の公園で、ブランコの座る部分が頬に激突し、頬骨が折れて、剥き出しになってしまったときも、私は血を流しながら、黙つて玄関に立っていたのだという。

しかし、私は、血まみれで騒ぎながら家に戻れば、親が動転してしまうであろうことを恐れていた。なるべく穩便なやり方で怪我の程度を伝えることが、ベストな方法であると考えたのだ。

「親の心、子知らず」とは、よく言われる事だが、私は「子の心、親知らず」だと言つてやりたい。あなたの息子は、どれだけ細やかにあなた達のことを考えているのかを知つて欲しい。私は、そんな傍から見れば、捻くれた子供だった。

私の家は、小学校五年生の時に一方の村から、もう一方の村に引っ越した。私が通っていた中学校は、二つの村の小学生が進学してくる学校である。不思議なもので、そのような輩は、以前の地域の友達とも、新しい地域の友達とも仲良くすることができない。つまり、どちらにも所属できない、エイリアンみたいな存在である。当然、友達も少なく、孤独な少年だった。少なからず、親を恨んだものである。

そんなある日、孤独な少年にも光明が差しはじめた。

その日は、工作の授業で、紙粘土の造形をみんなで作っていた。ある生徒の作品を皆で評価しあっていたとき、不意に後ろから独り言のような声で、「この頭の形、昨日の映画みたいだ。」という声が聞こえた。声の方に振り返ると、Kくんがニヤニヤしながら、その作品を見つめていた。

頭を真っ黒に塗ったその造形は、確かに、暗黒の世界から湧き上がる悪魔を彷彿とさせる、前の日の深夜映画

（題名は、確か『エンブリヨ』とかいうオカルト映画だったと思う）の一シーンを見ているようであった。

「君も、あの映画見たの？」私が興味津々で聞くと、「うん、面白かったよ。でも、悪魔憑きの子供なんて、所詮はポランスキーの一番煎じじゃないかな。」

わたしは驚いた。それは、中学生ごときがテレビの深夜映画をみているということも然ることながら、ある共

有意識というか、同じ思いを共有できる人間が、こんな身近にいたのかという、素直な喜びをもった。
因みに、彼の言う、ロマン・ポランスキーというのは、『ローズマリーの赤ちゃん』などの監督で、ユダヤ系ポーランド人、私も大好きな映画作家だ。その一件以来、私とKくんは親しく話すようになった。特に帰る方向

も一緒だったので、学校からの帰り道に、映画や、アニメの事などを、延々と話していた。

ある日、話に夢中になり、田んぼの畦道で、周りが暗くなつて、田んぼに嵌つてしまつた。夜遅く、泥だらけで帰ってきた息子を、母親は呆れてみていたが、以前の夢遊病のような息子でなくなつたことに、少なからず喜んでいるようだった。

CASE. 2

母親の大腿部には、大きな火傷の痕がある。この火傷の意味を、息子である私は、長い間、理解できずに過ごして來た。

昨年、叔父の葬儀に行つた際に、叔母からその意味を聞いた。

それは、私が二歳の時である。ようやく二足歩行ができるようになった、やんちゃな坊やは、無邪氣で、当時、何を見ても喜んでいたという。

ある日、母親が、一寸目を離した隙に、台所にかけこんだ坊やは、ガスレンジに掛かっている、ゴボゴボ鳴っている四角い容器に夢中になつた。

そして、目の前の赤いホースを握ると、力一杯引っ張つた。

次の瞬間、バランスを失つたガスレンジが流し台の下に落下、沸騰した鍋のお湯が、その坊やの背中に降り注ぐ。

物音で、異変を感じ取つた母親は、わが子の危険を直感的に判断し、全速力で流し台に駆け込んだ。

次の瞬間、熱湯は坊やの背中の一部と、母親の足に流れ落ちた。

泣き叫ぶ、わが子を抱え、母親は、自分がひどい火傷を負つてているにも関わらず、救急病院へ連れて行つたのだそうだ。

私は、その当時の記憶が無いので、このように客観的にしか語ることができない。からうじて私の背中に残つてゐる火傷の痕が、その当時の記憶を留めている。

そういえば、よく母親に、「背中の火傷の痕、見つともなかつたら、手術してきれいにしようか」なんて言わ

れていた。だけど、母の足の火傷のほうが、もつと酷くて、「僕のことより、自分の足をきれいにしたら、良いのに」なんて、口ごたえをしていたことを思い出す。

母は、自分の傷のことは何も言わなかつた。叔母によれば、子供に怪我を負わせた負い目から、自分への戒めとして、敢えて火傷の痕を残したのだという。

しかし、子供の私にしてみれば、自分の親が痛々しい姿を晒しているのを見るのが、とても辛い。いくら自分が戒めと言つても、私が原因だとすれば、負い目を感じるのはむしろ私の方だ。

私は、苦労をかけた親には、少しでも長生きしてもらいたいと思っている。だから、自身のこだわりから、自暴自棄にならないで欲しいと、心から願う。

CASE. 3

「私を子供扱いしないで！」と彼女は言つた。

とても気が強いくせに、淋しがりで、でも、笑うと笑顔がとても素敵な女性だった。

告白は彼女の方から。会社の帰りに呼び出され、思いを伝えられた。

前に、会社の同僚に誘われ、何人かで飲み会を行つたとき、やたら質問をしてくる、彼女を見て、気にはな

つたが、まさか、その子が私に興味をもっているとは思わなかつた。

付き合い始めてしばらく過ぎた後、彼女の家に行く機会があつて、彼女の本棚に、あの時質問された、私の好きな本だとか、CDだとかが、新品のまま置かれていた。好きな人の好きな物を共有することで、すこしでも好きな人に近づこうとしている…。私は彼女が背伸びをしているようで、少し可哀相に思えた。

そんな私の予感は当たり、半年も過ぎた辺りから、十五も歳の離れた私と彼女は、事あるごとにぶつかつた。「あなたの事をもっと知りたい」と言われれば、自分が大切にしていることについて、話したいと思うのはごく自然なこと。だが、それが彼女の考えている男性像に合わない場合が多く、その度に「ダサイ」だと「古臭い」などと評価される。

つい、その場の感情で、罵ったり、ふて腐れたりしてしまつ。そんな時、決まって彼女がいうセリフが、冒頭の言葉だ。

大人気ない…、罪悪感が胸に残る。

対等な関係を作りたいと思えば思うほど、相手を傷つけてしまうというジレンマ。彼女も、やはり同じようなギャップに悩んできただのかも知れない。

E L T の 「T i m e g o e s b y」 がラジオから聞こえてきた。あの時こうなつていればと、今更考えるの

は、空しいばかりだ。

4. メメント

CASE. 1

私は、職場で総務関係の仕事をしているので、訃報、つまり人の死の知らせを受ける場面が、比較的多い。普段であれば、お通夜に赴いたり、香典をお包みしたりするなどして、故人を偲ぶのだが、昨日送付された手紙は、すこし勝手が違った。

その手紙には、「死体検案書」と記載された書類が一枚入っているのみ。直接的死因として医師が診断した、「定型的縊死（いし）」という文字が、無機質に記入されていた。いくら医学的用語に無知識な私でも、それが首を吊つて死んだ様子だということが判った。

実は、数日前に、それまで何年間も請求不履行だったご本人宛に、内容証明付の請求書を送付したばかりだったのである。

内容証明の配達完了日が、一月九日、書類の死亡（推定）日が、一月十二日で、請求書の届いた僅か三日後に、故人は自ら命を絶ったという訳だ。

それも、その書類の右上には、ご遺族が記入したのであろう、「申し訳ございません」という、消え入るような文字が、震えるような筆跡で描かれていて、その手紙をより一層痛々しいものにしていた。

思うに、ご本人は、他にも負債をしていたと想像できる。金額にして十数万円という、数ある請求の一つでしかない、こちらからの督促状を見て、大いに心を動かされたというのは考えにくいかが、なにか自分がカフカの「審判」に出てくる、「死の門番」にでもなった気分で、ものすごく気持ちが滅入ってしまった。

ただ、ご故人には申し訳ないが、私はそのご本人を思い出すことが出来ない。それくらい前の顧客であり、記憶の彼方に押しやられていた存在。昨年末に会計監査で、過去の負債処理を要求されなければ、未だ有耶無耶にされていたであろう事を考へると、改めて運命の残酷さを呪わすにはいられない。
そんな、何とも言えない罪の意識を感じながらも、私は十五年前の、ある忌まわしい記憶を辿っていた。

CASE. 2

高尾山の湧水は、十五年前に降った雨が、山中を巡り廻って湧き出したと言われる。山の十五年の記憶が凝縮されたものだ。

だが、人間の記憶ともなると、しばしば曖昧なものになる。私など、飲み会の次の日に、前の日の記憶が凝くなっていることが少なくない。

人間にとつて都合の悪い記憶は、常に忘れ去ろうとするものなのかも知れない。私も忘れてしまいたい出来事は沢山あるが、この記憶だけは心の片隅にこびり付いて、離れない。

その知らせは突然にやってきた。当時、余り携帯電話も普及していない時期だったので、一回目に会社へ電話があつた時、私は配達で留守にしていた。二回目の電話で取り次ぎを受けた私は、実家の母親の神妙な言葉遣いに、只ならぬ予感を感じた。

母親は、「氣を落とすんじゃないよ」と、わざわざ前置きをした後で、「K君が亡くなつたって」と私に告げた。

K君というのは、私の中学以来の友人で、学校を卒業した後も、度々会つて話しをする位、親しい間柄であった。つい、その二ヶ月前にも彼の家で会つて、夜遅くまで語り合つたばかりだったので、死んだというのが、何か現実感の無いものに聞こえた。

「何で…。」呆然として言葉が出てこない私。

それを感じ取ったのか、母親も「自殺らしいよ、彼の家の離れの部屋で。」と事情を説明してくれた。

「離れる部屋」と言えば、彼と最後に話した場所である。少し古くなつた電灯のチカチカした感じや、それに照らされた壁のカレンダーの図柄などが、次々と頭の中に浮かんできた。

「お通夜、今日だって、戻つてくる?」という母の問いかけに、「突然だもん…、今日は行けない。」と言うのがやつとだつた。

近々、行くことを告げ、電話を切つた私だが、正直言つて、その日は仕事をする気になれなかつた。

彼は、その月に三十歳の誕生日を迎へようとしていた。誕生日まであと十日という日に、自ら命を絶つた彼の心中は、どのようなものだったのだろうか。

記憶は恣意的なもの。私のこびり付いた記憶も、徐々に風化して、原型を留めなくなるかも知れない。そして、その時の自分にとって、都合の良い記憶に置き換えられる。此処に書き留めておこうと思ったのは、自分にとって憂鬱な記憶でも、事実として、自分の心の外に記録しておきたかったから。

Kくんの訃報を受けて、一週間後の週末に、私は田舎へ帰ることができた。出迎えてくれた、彼のお母さんは、以前に会った時とは比べ物にならない位、憔悴していて、気丈に振る舞う姿が、かえって痛々しさを窺わせた。

「せっかく来てくれたのに、ごめんなさいね。Kちゃん、未だ帰つて来られなくて…。」

「あ…、そうですか。」私は、そう言うのがやっとだった。

彼女は、未だ、息子の死を受け入れられないのかも知れない。時折涙をみせながら、Kくんの思いで話しをする、その言葉からも、彼はいつかきっと帰つてくるという希望のようなものが感じられた。その証拠に、それから十年間というもの、彼の部屋は扉が閉じられることがなく、彼の生前のままに保存されていた。

私は、二十代で人生の幕を閉じた、Kくんを弔いたい一身で、毎年、彼の命日には、休暇を取って、墓参りに出かけた。それが途切れたのが四年前、彼の弟に念願の子供が産まれ、Kくんの部屋を片付けたいと切り出したお母さんを見てから。そろそろ故人であるKくんのお母さんという、重荷から解放させたい（私が訪問するごとで、ご家族にとつて重荷になっていたことは否めない）と感じたからだった。

彼女は何かふつ切れた表情で、「何か、記念になるもの持つて行つてちょうだい。Kちゃんも喜ぶから…。」と、私に語りかけた。

一度は固辞したが、どうしてもと言うので、彼が好きだった、ローリング・ストーンズのCDを一枚だけもらつた。

そのCDは今でも持っている。時々、聞こうとするけれど、最後まで聞くことができない。決まって「悲しみのアンジー」のところで止めてしまう。